

研究報告書：「ユダヤ人種」のオクシデント化：イスラエルにおける「白人中心主義」の起源

グローバル・スタディーズ研究科
地域研究専攻博士後期課程
田澤セバスチャーノ茂

報告者は上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科よりいただいた「2022 年度グローバル・スタディーズ研究科研究助成金」をもとに、「ユダヤ人種」のオクシデント化：イスラエルにおける「白人中心主義」の起源」をテーマに文献研究を実施した。

中東地域において西洋文化が最も洗練されていると言っても過言ではなく、また世俗的価値観が支配的な「ヨーロッパの飛び地」としての地理的特性を有するイスラエルは、歴史的にアシュケナズィーム（ヨーロッパ出自の白人系ユダヤ人）を主体に建設され、白人国家としての政治的様相を呈してきた。しかし、こうした様相というのは同時に「ユダヤ人国家」としての自己定義を有する同国の矛盾を強調するものでもあった。

上記の矛盾を焦点に、本研究の目的とは現代イスラエル社会が抱える負の側面としての「構造的な人種差別（Institutional racism）」の問題を明らかにすべく、その要因となっている「白人中心主義」の起源を探ることであった。本研究助成金での研究成果であるが、報告者は文献研究をもとに、イスラエルにおける「白人中心主義」の形成メカニズムにおいて以下のような歴史的な二段階的構造が存在することを明らかにした。

第 1 に、イスラエル国家のオリエンタリズム的性格が挙げられる。シオニズムは一般的にイスラエル建国運動もしくはユダヤ民族主義として定義付けられている。しかし、シオニズムの創始者であるテオドール・ヘルツルが 1896 年に執筆した著書『ユダヤ人国家』の中にはパレスチナでの「ユダヤ人国家」、すなわちアシュケナズィームの移民主体の〔西洋的な〕国民国家の建設が将来的にヨーロッパのためにアジアに対する防壁の一部を成し、野蛮に対する文化の前哨を担うと主張している¹。

19 世紀後半に台頭した反セム主義（人種的反ユダヤ主義）によりヨーロッパからパレスチナに移住したアシュケナズィームの入植者は現地のアラブ人の服装（代表的なものとしてアラブ人男性が頭に被るクフィーヤが挙げられる）を真似し、入植者としての文化的独自性を形成しようとしたものの、内面的な面ではヨーロッパ人としての文化的・政治的アイデンティティに

¹ Theodor Herzl, *Der Judenstaat: Versuch einer modernen Lösung der Judenfrage* (Leipzig und Wien: M. Breitenstein's Verlags-Buchhandlung, 1896), 29.

依拠——実質的には執着という表現が正確だが——していたことが伺える (Dowty 2013)。また、そうしたアシュケナズィームの西洋中心主義的な性向は新生イスラエル国家の国家原理と密接に結びつき、新たに移住してくる非白人系ユダヤ人の移民、とりわけミズラヒーム (中東圏出自のユダヤ人) やベタ・イスラエル (エチオピア系ユダヤ人) 等に対する同化政策の政治的原動力と化したのは言うまでもない。非白人系ユダヤ人はアシュケナズィームと同様に「ユダヤ人」でありながらも、その文化的アイデンティティは非西洋かつ野蛮なものとして否定され、西洋的な生活様式を受容を通じてのみ「イスラエル国民」になるほかなかったのである (臼杵 1998)。

第2に、「ユダヤ人種」のオクシデント化における人類学的作業が挙げられる。本研究では「ユダヤ人種」をめぐる人類学者らの言説の整理を行なった。19世紀後半の時点で、「ユダヤ人種」に関する非ユダヤ系人類学者による見解として、ベルリン大学の著名な人類学者であるフェリックス・フォン・ルシャンはユダヤ人を純粋な人種とみなすことには否定的で、むしろ彼らの身体的特徴である短頭はかつてのユダヤ人の人種的祖先にあたる「古代ヘブライ人」とヒットイト人との間の人種的混交のあらわれであるとさえ主張していた (Efron 1994)。

また、ドイツ国内での「人種衛生学」発展の祖となった優生学者アルフレート・プレーツは、アーリア人と同様にユダヤ人——この場合ではアシュケナズィームを指す——をも「文化的人種」もしくは「文明化された人種」のカテゴリーに属させ、さらにはその起源が「アーリア人」にあるのだと考えていた (Efron 1994; ポリアコフ 1985)。

先述したヘルツルの理想主義的な「ユダヤ人国家」構想に現実味を具現化すべく、医師ないし人類学者等の肩書きを持つドイツ語圏シオニスト²たちは、上記のルシャンやプレーツらの主張を踏襲する形で、将来の民族国家の主体となるユダヤ人の脱「セム人種」化、すなわち「ヨーロッパ (=オクシデントな) 人種」への転化に努めようとしたと推察される。

例えば、ロシア出身の人類学者 S・ヴァイセンベルク (Weissenberg 1895) はロシアと中東・北アフリカ地域のユダヤ人を比較対象に自然人類学による調査を敢行したが、結局のところ「ユダヤ人種」としての共通の人種的特徴の発見までには至らなかった。その反面で彼はユダヤ人の身体的特徴が生得的な人種的性質ではなく、むしろ居住地域における政治的・社会的環境に応じて可変的に形成されるものだと考えた。また、セファルディーム (北アフリカ・地中海圏出自のユダヤ人) の方がむしろアシュケナズィームと比較して「セム人種」としての人種的特徴を保持すると主張している。ここで報告者自身の推測になるが、ヴァイセンベルクの主張に関して裏を返せば、アシュケナズィームが日常生活で若干ながらもセムの性質 [=聖書ヘブライ語] を保持している点を除いて、そのほとんどが人種的に「ゲルマン」化³したユダヤ人であり、もはや彼

² ドイツ語圏シオニストたちが自らの活動拠点にしていたドイツ帝国は人種学の中心地であり、彼らはその思想的影響を強く受けていた。

³ アシュケナズィーム (主にオストユーデン [=東欧ユダヤ人]) の日常言語として使用されて

らは非「セム人種」にほかならないという彼自身のもう 1 つの主張も読み取れると言えよう。

上記のヴァイセンベルクの主張に続く形で、ポーランド出身の民族学者 J・M・ユート (Judt 1903) やイグナーツ・ツォルシャン (Zollschan 1920) もユダヤ人は歴史的に文化的独自性を維持してきたと同時に、さまざまな民族集団との人種的混交を通じてその人種的要素ないし特徴を吸収したことから、アシュケナズィームに限れば、純粋な「セム人種」からの逸脱を誘発したという持論をもとに、「セム系言語を話すヨーロッパないし地中海人種」としてユダヤ人を位置付けたのである。

社会学者のアルトゥール・ルッピン (Ruppin 1904) は、パレスチナに定住していた「古代ヘブライ人」に関して印欧語族に属する農耕民族として位置付けていた。また、皮肉にもドイツ国内の反セム主義者の憎悪言説を肯定的に用いる形で、「古代ヘブライ人」がセム系諸民族との人種的混交を通じて従来の農耕文化を放棄し、商業文化に従事したことで、最終的にユダヤ人は「セム人種」と化したという持論を展開している。それに加えて、彼はイスラエル建国以前に非白人系ユダヤ人によるイシューヴ (パレスチナにおけるユダヤ人移民社会) への浸透に関してもある一種の警戒心を抱いていたのである。

このことから、アシュケナズィームがアーリア的性質を保持する混血人種である、という人種的な前提条件に基づき、人種主義理論を信奉するドイツ語圏シオニストたちはセムの性質を色濃く保持する「アジア人種 (オリエント)」であるセファルディームないしミズラヒーム、さらには「黒人」であるベタ・イスラエル等の非白人系ユダヤ人に対し、アシュケナズィームが半ヨーロッパ人種 (オクシデント) であり、北方人種のような外貌を少なからず保持する近代的な人種集団である、という人種主義言説の正当化に努めたのではないかと推測される。

枚挙に暇がないゆえ、紙幅の都合上、以上の 2 点の論究だけに留めておく。最後に、ドイツ語圏シオニズムが主導した人類学的作業としての「ユダヤ人種」のオクシデント化は、上記のルッピンに代表されるように、ドイツ語圏シオニストが自らの内面に抱いていた「白人中心主義」の発露の結果であり、またシオニズム自体が潜在的に「白人ナショナリズム」としてのイデオロギー的特徴を有する点に関して再発見できたことは本研究での最も重要な成果と言えよう。

いたイディッシュ語はヘブライ文字を用いるが、文法及び語彙のほとんどが中世ドイツ語由来であることから、言語学的には印欧語族ゲルマン語派に分類される。